

米国 NPO Teach For America による教育変革ムーブメントに関する調査・研究

慶応義塾大学 総合政策学部 4年

井上英之研究会 木下みらい (s06333mk@sfc.keio.ac.jp)

1. はじめに

現在、米国では Teach For America (以下 TFA) という非営利組織がエリート大学生の注目の的となっている。“One day, all children in this nation will have the opportunity to attain an excellent education.”というミッションを掲げ、米国の深刻な教育格差を解決すべく、TFA は低所得地域に優秀な大学新卒者を教師として2年間派遣している。設立から20年、TFA は教室現場のみならず、国家レベルでも社会的なインパクトをもたらし、教育分野における変革ムーブメントの中心的存在となった。本研究では、教育分野で社会イノベーションを起こしつつある TFA の事業モデルと戦略について調査・分析している。

2. 目的

本研究の目的は、インタビューと教室訪問を通じて、下記の2つのリサーチクエスション(以下 RQ) に対して立てた仮説を検証することである。今回は、TFA の事業モデルを分析する上で欠かせない「人材」と「パートナーシップ」に着目した。

なぜ TFA は、大学生のファーストキャリアとして人気があるのか？

TFA と提携している企業・大学院のモチベーションは何か？

3. 実施内容

9月14日～27日まで渡米し、ワシントン DC とボストンでフィールドワークを行った。それぞれの地域でインタビューした方々、インタビュー項目と結果、そして教室訪問の様子について紹介したい。



インタビューした方々

9/15(火) Julie Brown (TFA 卒業生。現在 KIPP の教師。)

9/16(水) Jon Marker (G James Gholson Middle School で歴史を教えている2年目の TFA 教師。)

9/16(水) Randy Cher (G James Gholson Middle School で国語を教えている1年目の TFA 教師。)

9/17(木) Mura Ross (Manager of Corps Professional Development for Metro DC region)

9/24(木) Amanda Hillman (Director of Alumni Affairs & Special Projects)

インタビュー項目

TFA 教師に対しては、学生時代に持った TFA の印象・TFA 教師としての経験・キャリアに対する志向の変化などについて伺った。一方 TFA スタッフに対しては、本人の背景（TFA との関わり）、TFA のリクルート活動、企業・大学院パートナーシップについて伺った。

教室訪問の様子

今回訪問した学校 G James Gholson Middle School は、99%が黒人の生徒で構成されており、多くの生徒が給食の援助を受けている低所得家庭に生まれた子どもたちだ。私は 8 年生に米国史を教える 24 歳の TFA 教師 (Jon) の授業を見学した。「全員が学期末試験の成績で 8 割以上獲得する！」という目標を壁に掲げた教室で、授業中の議論を導き、生徒の疑問に答え、



集中力を欠いた生徒の関心を引く Jon は、大学卒業して 1 年しか経っていないとは思えないほどのリーダーシップを発揮していた。

4. 成果

今回のフィールドワークでは、RQ に対する仮説を検証することができたと同時に、今後の研究につながる人的ネットワークを築くことができた。

1 つ目の RQ に関しては、年中行われる積極的・戦略的なリクルート活動によって、多くの学生と接点を持ち、応募者数を増やしていることが明らかになった。さらに、TFA を PR する際は「TFA への参加は本来目指していたキャリアを捨てるのではなく、その第一歩になる」という見せ方をしていることも分かった。つまり TFA の積極的なリクルート活動、そして活動に参加を促すための「伝え方」が、大学生のモチベーションに作用していることが考えられる。

2 つ目の RQ に関しては、TFA 教師のリーダーシップ、目標達成能力、時間/タスクマネジメント能力と同時に、ビジネスや政策の影響を直接受ける低所得地域の現状を実際に見てきた、という「経験」の 2 点を企業や大学院は高く評価していることが分かった。また、毎年パフォーマンスの質を向上させている TFA 自体への信頼性が、企業や大学院のパートナーシップの提携を促したのではないかと考えられる。

5. 謝辞

本プロジェクト実施にあたり、ご協力をいただいた Teach For America のスタッフと先生の皆様、助言をいただいた井上先生・井上研究会 OBOG の皆様に感謝いたします。本フィールドワークは、2009 年度湘南藤沢学会「シンポジウム・研究ネットワークミーティング基金」の支援の下に行われた。